

京都フィロムジカ管弦楽団 第45回定期演奏会

2019年6月16日(日) 午後2時開演 大津市民会館 (大ホール)

《 曲 目 》

ベルリオーズ／序曲『海賊』

Hector Berlioz (1803-1869) : Le Corsaire Op. 21

シューマン／交響曲第4番・初稿 (1841年稿)

Robert Schumann (1810-1856) : Symphonie Nr. 4 Op. 120 Erstfassung 1841

I. Andante con moto - Allegro di molto

II. Romanza (Andante)

III. Scherzo (Presto) - Largo - IV. Finale (Allegro vivace)

—休憩—

ニルセン／交響曲第2番『4つの気質』

Carl Nielsen (1865-1931) : Symfoni Nr. 2 De fire Temperamenter Op. 16

I. Allegro collerico

II. Allegro comodo e flemmatico

III. Andante malincolico

IV. Allegro sanguineo

指揮：木下 麻由加

京都芸術センター制作支援事業

お客様へのお願い

～誰もがより楽しめる音楽会にするために、皆様のご協力をお願いいたします～

- 携帯電話・アラーム付腕時計など音の出る機器をお持ちの場合は、電源を必ずお切りください。
- 演奏中の私語は固くお断りいたします。
- 客席での飲食、喫煙、写真撮影、許可のない録音・録画は固くお断りいたします。
- 補聴器が異常音を発することがございます。ご使用の方はご注意願います。
- 演奏中の客席へのご入場は固くお断りいたします。
- 「せきエチケット」にご協力ください。せき、くしゃみがこらえられないときは、ハンカチやタオル等で口と鼻をおおうよう、お願いいたします。なお、演奏中の「のどあめ」の使用は、開封の音がかえって周囲のお客様のご迷惑になりますので、ご遠慮願います。
- 演奏者が音を出していなくても音楽が続いている場合がありますので、物音をお立てにならないよう、ご注意ください。

指揮者

木下 麻由加 (きのした まゆか)



2010年、神戸大学発達科学部人間表現学科卒業。スカンジナビア・ニッポン・ササカワ財団より助成を受け、デンマークに留学。2014年、デンマーク王立音楽アカデミー指揮科卒業。2012年及び2013年、ウクライナ国際マスタークラス修了。修了演奏会にてチェルニーゴフ・フィルハーモニー交響楽団を指揮し、ロシア音楽奨励賞を受賞。

現在、複数のオーケストラ、オペラ団体、吹奏楽団、弦楽合奏団の客演指揮及び合奏トレーナー、副指揮を務める。また、C・ニルセンを中心とする北欧作曲家の研究をおこなっている。

指揮を斉田好男、高谷光信、J・フッバーク、N・スーカッチ、P・ラーセン、ピアノを木下千代、伴奏法をN・ゲーデ、作曲法をA・ブロスゴード、音楽理論をG・ラーセン各氏に師事。

♪ プレ・コンサート ♪

午後1時15分より

今回のプレコンサートはロビーではなくホール内で行いますので客席にてお楽しみください

石川 亮太／山の音楽家じゅんばん協奏曲

(原曲：ドイツ民謡、チャイコフスキー、モーツァルト、ビゼー、デュカス)

フルート：中川 オーボエ：服部 クラリネット：浦野 ホルン：北山(絵) ファゴット：奥野

5人の「山の音楽家」たちが、木管五重奏を構成する楽器のために書かれた有名な旋律を順番に披露していきます。まず登場するのはオーボエ。哀感を込めて『白鳥の湖』より「情景」を、続いてホルンが暖かい音色で『ホルン協奏曲第1番』より第1楽章、そしてフルートが優美に『アルルの女』より間奏曲を演奏します。ファゴットがとぼけた味わいで『魔法使いの弟子』を披露し、最後はクラリネットが軽やかに『クラリネットポルカ』を決めてくれます。

それぞれの個性ある楽器の音色をお楽しみください。

K.クック／序奏とロンディーノ

トロンボーン：西村、宮下、安田 テューバ：北垣

イギリスの吹奏楽作曲家らしいK.クックが、1951年に作曲したらしい、世界初らしいテューバ四重奏曲です。日本ではユーフォニアムとテューバによるアンサンブルでたまに演奏されることがあるそうです。このように一般にはほとんど知られていない曲ですが、今回はトロンボーンとテューバの四重奏で演奏させていただきます。前半のゆっくりとした序奏と後半の駆け抜けるようなロンド風の旋律が楽しい、とても聴きやすい曲だと思います。

曲目解説

遠藤 啓輔(トランペット)

ベルリオーズ／序曲『海賊』

フランスを代表する作曲家ベルリオーズは個性的な経歴の持ち主である。何しろ、ピアノを学んでいないのだ（縦笛のほか、フルートとギターは得意だったらしい）。しかし、むしろピアノで作曲しないからこそ、オーケストラの斬新で効果的な扱いができたのかもしれない。ベルリオーズのオーケストラ作品は、各楽器の持ち味が前面に出ていて色彩感が豊かだ。

ベルリオーズはパリ音楽院に入学して間もない青年時代から管弦楽曲を発表していたが、その独創性には賞賛と異端視とが相半ばしたようだ。そのせいもあって本拠地パリでの評価はいまひとつで、ベルリオーズは著作活動もして糊口をしのいだ。皮肉にも、そうした著作によってもベルリオーズは音楽史に残っており、僕もベートーベンの曲目解説を書くときは常にベルリオーズの著書を参照させてもらっている。

ベルリオーズは25歳の時に音楽院のオーケストラが演奏したベートーベンの交響曲を聴いて衝撃を受け、熱中する。ベルリオーズのオーケストラ作品は、拍の力強い打ち込みが音楽にしっかりと背骨を通しており、この点がベートーベンからの影響かもしれない。しかしベートーベンとは全く異なる独創性があるのもベルリオーズの凄さだ。ベートーベンやその影響を強く受けた作曲家は、4小節や8小節からなる規則的なフレーズによって均衡を保っていることが多い。しかしベルリオーズは各フレーズの長さがまちまちである。これによって、意外性と柔軟性がある音楽の面白さが実現している。形式の均整よりも、直観の表出を重視したベルリオーズの個性がここに現れている。

本日演奏する序曲『海賊』はベルリオーズ40歳代の円熟期の作品である（ちなみに有名な『幻想交響曲』は27歳での作品）。地中海に面した南フランスのニースに滞在中の1844年に作曲し、翌年パリで初演したが、その時の題名は『ニースの塔』であった。翌年『赤い海賊』に改題され、さらに改訂を経て、1852年に現在の序曲『海賊』の名で出版された。海賊にまつわる2つの題名は、いずれも文学作品から取られたらしく、海の印象以外は音楽の中身とはあまり関わりがなさそうだ。名作に乗った一種の便乗商法のようなタイトルなのかもしれない。標題を意識することなく、ベルリオーズの独創的な音楽と見事なオーケストレーションを楽しむのが良さそうだ。疾走するような激しい動き、濃厚な歌、シンコペーションで複雑に彩られた恰幅の良い旋律、といった多様な要素を、短い曲の中に見事に詰め込んだ逸品で、ベルリオーズの鬼才ぶりを堪能できる。

シューマン／交響曲第4番ニ短調（1841年・初稿）

フィロムジカはこれまでに、ブルックナー、シベリウス、マーラーの作品の初稿（もしくは初期段階の稿）を紹介してきた。初稿とは、作曲者がいったん「これで完成だ！」と思う作品を書き上げたものの、その後に大幅な手直し（改訂）をおこない、その改訂された楽譜が世に広まったため、お蔵入りしてしまった最初の段階の楽譜のことである。僕は、どの作曲家の作品も初稿が大好きだ。「改訂した楽譜の方が良くなってるんじゃないの？」という疑問も当然あるだろうが、事はそう単純ではない。作曲者が改訂した背景には、助言者の理解不足や初演者の力量不足など、作品の本質とはかけ離れた要因があることが多いのだ。そして多くの場合、初稿はその作曲家ならではの奇抜な個性が毒々しい魅力を放っているのに対し、改訂稿は万人受けするように修正されたがために独創性が「解毒」されてしまって物足りないのだ。

本日演奏するシューマンの4番も、改訂稿によって人気を獲得した。しかし2003年に出版された最新の研究成果に基づいた初稿スコア（ブライトコプフ&ヘルテル社刊）の序文を読むと、改訂された理由は初稿の質が悪かったからではないことが分かる。この曲は1841年、第1交響曲を完成した直後に作曲された（だから作曲順としては、この『交響曲第4番』は2番目の交響曲である）。初演後すぐにでもシューマンは楽譜を出版したかったようだが、交響曲を2曲たて続けに出版することは販売戦略上得策でないということで出版社が難色を示し、お蔵入りになったらしいのだ。10年後、シューマンは既存作品のオーケストラ編曲に熱中した時期があり、その際にこの交響曲の改訂も行った。そしてその1851年改訂稿が出版され、この時点で既に3曲の交響曲を出版していたので「第4番」の番号が付けられた。

この交響曲第4番も、初稿にこそシューマンならではの毒々しい魅力がある。僕が思うに、シューマンの「毒」は極端な表情の変化と、そのしつこさだ。のたうち回るように苦しんでいたかと思えば、突然、天から光が射してその崇高さに熱狂する。このような、落差とも言って良い程の極端な表情変化が、何度も何度も聞かれる。弦楽器と管楽器が対峙するように呼び交わす初稿独特のオーケストレーションが、この変化の激しさを音色的にも印象付ける。そして、この変化に身を浸しているうちに、興奮が湧き上がってくるのだ。シューマンが若い頃から精神疾患に苦しんでいたことは良く知られているが、この変化の極端さやしつこさは、その反映かもしれない。こうした病も含めたそのすべてが、シューマンという一人の人間の、かけがえのない人生である。その人生における苦しみ、それを克服しようとする力強い意志、それらを追体験できるのがシューマンの音楽を聴く魅力の一つだ。現在一般的に演奏されている4番の改訂稿は、作品の骨格は大きく変わっていないものの、オーケストレーションが変えられている。弦楽器と管楽器が豊かにブレンドされ、作品全体が芳醇な響きにくるまれている。しかしこの素晴らしい響きがかえって、シューマン独特の「極端な変化」を覆い隠してしまっており、物足りない。初稿を世に広めることに尽力したブラームスは、シューマンの死後にクララ・シューマンに宛てた手紙の中で「改訂によって得たものは何もない。優雅さ、軽快さ、透明感が失われてしまった」と書いたそうだが、正鵠を射ている。

初稿の初演は、1889年に、ヴァーグナーの『ラインの黄金』や『ヴァルキューレ』を初演した名指揮者フランツ・ヴェルナー（1832-1902）によってなされた。ただしこの初演の際、部分的に改訂稿のアイデアが援用されたようで、そうしたヴェルナーによる改変を取り入れたまま「初稿」として出版もされてしまった。2003年になってようやくシューマンのオリジナル通りの初稿が出版されたが、それを見るとヴェルナーの改変は以下の2点が重要である。まず、第4楽章のアレグロ・ヴィヴァーチェに入る直前、シューマンはトランペットの短いファンファーレを書いているが、ヴェルナーはこれをカットした。次に、第4楽章の終盤、木管楽器のソロで印象的なフレーズが歌われるが（譜例1）、ヴェルナーは改訂稿と同様に低弦を重ねて、洪さが魅力的な音色に改変している。僕としては極めて不本意なのだが、入手できたパート譜の関係上、本日はこのヴェルナーによる改変がなされた楽譜で演奏する。



譜例1 第4楽章より

第1楽章の冒頭は、遅く重苦しい序奏で始まるが、突如として内面からエネルギーが噴出してアレグロの主部になだれ込む。情熱的な主部に入っても暗い色彩はそのままだが、楽章の終盤になると高みに飛翔するような上昇音型が繰り返される。

第2楽章はアンダンテのゆったりとした音楽。オーボエとチェロの独奏がブレンドされた洪い音色で、哀愁に満ちた旋律が歌われる。一方で、第1楽章冒頭の重苦しい序奏が回想されるのも印象的だ。中間部は、音型

こそこの冒頭の序奏に似ているが、表情は正反対の天国的な明るさになる。ヴァイオリンのソロが小鳥のように愛らしく囁き、神を象徴する楽器トロンボーンが柔らかく神々しい光を放つ。

第3楽章はスケルツォで、逞しく躍動的な主部と、花園のように穏やかな中間部とが対比される。そして、スケルツォ主部の再現を経て、中間部が再度演奏されると、そこに見えていた花園が巨大な平原に変貌するかのようにテンポが大きく緩む。平原の彼方から聞こえる幻聴のように金管のファンファーレが呼び交わしあうと、地底からエネルギーが噴出するようにして快活で覇気に満ちた音楽が出現する。第3楽章から途切れることなく**第4楽章**に突入したのである。提示部の輝かしさに対し、展開部での寂しげな表情も魅力的だ。第1楽章と同様に上昇音型が繰り返され、終盤ではテンポまで加速してさらなる興奮を煽る。最後は、神を象徴する楽器トロンボーンの咆哮と、デウスを象徴するD（レ）の音によって締めくくられる。

ニルセン／交響曲第2番『4つの気質』

北欧デンマークの作曲家ニルセンは、同じ北欧出身で同い年のシベリウスに比べると知名度はやや劣るものの、熱狂的な愛好者を獲得している作曲家だ。特に近年では、著名なバレエダンサー熊川哲也が、ニルセンの音楽の抜粋によって新作バレエ『クレオパトラ』を作りあげたことが注目される。劇音楽『アラディン』を主要な素材にしながらも、交響曲などの抜粋を適宜挿入。日の出の場面では太陽神を描いた序曲『ヘリオス』を演奏するなど、ニルセンへの深い理解がうかがえた。僕はバレエ鑑賞に関しては全くの素人だが、ニルセンの濃密で攻撃的な音楽が、クレオパトラの変転激しい人生を描いたダンスを見事に盛り上げていて大いに興奮させられた。オーチャードホールのロビーは、展示されていた衣装とともに記念写真に納まるファンが行列を作るなど、行き慣れた音楽会とはあまりに異なる雰囲気面で面食らった。しかし別の見方をすれば、クラシック音楽愛好者の狭い世界を超えたところからニルセンの知名度が上がる可能性がある、とも言えよう。「あなた音楽愛好者を名乗っていないながらニルセンを聴いたことがないの!」という会話がなされる時代が来そうで楽しみだ。今回で4曲目のニルセン演奏となるフィロムジカは、その時代の先鞭をつけてきた楽団だと自負する。

それにしても、このように一流の表現者をも魅了してしまうニルセンの魅力とは何だろう。僕が思うに、ニルセンの他に真似できない独創性は、リズムの力強さと響きの濃密さにあると思う。それはニルセンの生い立ちが関係しているかもしれない。ニルセンはデンマークのフュン島の片田舎で生まれ育つ。父は村のアマチュア音楽家で、ニルセンも少年時代から村の楽団でヴァイオリンや金管楽器を演奏した。ニルセンの音楽の力強いリズムは、こうした田舎の村楽師の素朴な力強さに由来しているのではないかと想像する。青年になったニルセンは、篤志家の援助を受けて19歳で首都コペンハーゲンの音楽院で本格的にヴァイオリンを学び、24歳で王立楽団の第2ヴァイオリン奏者となり、作曲活動や自作の指揮活動と並行しながら実に40歳まで務めた。ニルセンがオーケストラの奏者、それも第2ヴァイオリンであったということは重要だろう。第2ヴァイオリンというポジションは、音楽を旋律だけでなく、内声の響きや、リズムを秩序立てる構造面から理解することが求められる。ニルセンのオーケストラ作品はいずれも、密度の高い内声の響きと、骨太なリズムが魅力的である。これらは、ニルセンが所謂「セカンド弾き」であったことと無関係ではあるまい。

ニルセンはオペラや協奏曲、管弦楽曲など幅広い分野の作品を残したが、交響曲はそれほど長くない彼の人生の要所を彩る重要なジャンルである。中でも晩年の5番・6番は交響曲の枠を大胆に打ち破った独創的な傑作である。それに至る4曲の交響曲も、古典的な交響曲の枠組みを踏襲しつつも、それぞれに異なる個性がある。本日演奏する交響曲第2番は、作曲者37歳の時の作品。古典的な4楽章構成を堅持しているが、交響曲第

1番と比べてトランペットやテューバが増強されるなどして響きが拡充され、前述したニルセンらしい濃密な響きがより色濃くなっている。そして各楽章に、人間の「気質」から取られたタイトルが付けられているのが面白い（音楽表情指定としてイタリア語で記されている）。

第1楽章には「collerico」と書かれている。解説書の類では「胆汁質」と訳されているが、これでは意味が分からない。辞書を引くと、この語には「怒りっぽい」「短気な」という意味のほか、「集める」という意味もあるようだ。あまりにも集まりすぎると「衝突」が生じ、そして、軍旗が衝突すれば戦争となるため、「開戦」や「攻撃」の意味も派生したらしい。このタイトルにふさわしい、怒気に満ちた激しい要素たちが、短い楽章の中にギュウギュウに詰め込まれている。もともとニルセンは濃密な音響を作る人なので、この楽章の密度の高さは尋常でない。3連符と2連符の衝突が火花を散らし、主旋律と副旋律が交戦するように対峙する。

第2楽章は「flemmatico」。「粘液質」と訳されるが、ラッパ群を休ませたこの楽章はニルセンにしては軽快な響きで、ねちっこいイメージはない。むしろ、この語が持つ「冷静な」「冷淡な」「不精な」という意味の方が楽章のイメージに近い。攻撃的な第1楽章とは対照的に、力みの無い旋律が、焦点が定まらずに淡々と流れていくような楽章である。ただし中間部で、管楽器とティンパニが下降音型を鋭く打ち込むのが異彩を放つ。

第3楽章は「憂鬱質」と訳される「malincolico」。この語には「陰鬱な」「重苦しい」「落胆した」という意味があり、悲嘆に満ちた旋律が、暗い情念を伴って吹き荒れる。この楽章では実験的な音響が導入されている。ティンパニがトレモロをする際に、太鼓の皮の上に木の枝の束を乗せて雑音を出すように指示がなされているのだ。悲嘆に暮れる自らの心のざわめきに耳を澄ましているのだろうか。

第4楽章は「sanguineo」で、「多血質」と訳される。「血の気が多い」ということだが、そこから想起されるイメージは、「生命力の源」といったもののほかに、「血で汚れた殺戮者」という恐ろしいものもある。この楽章は実際、生命力に溢れているが、ときおり暴力的な音響が襲い、かと思えば、不気味なまでに静かな弦楽合奏に震撼させられもする。そして最後は、軍隊の行進のようになって閉じられる。

なお、このように各楽章が全く異なる個性を持った交響曲第2番であるが、この曲全体が巨大なひとつの変奏曲（冒頭で提示したひとつだけの主題を、少しずつ変化させながら連ねていく音楽）であるという見解もあるらしい。確かに各楽章の印象的な主題を比較してみると（**譜例2～5**）、ノックするような音の連続に続いて、細かい音符が激しく上下する、という様相が共通している。異なる4つの気質を描いたが、それらの気質は一人の人間の中に共存しているものである。人間とは誰しも多様な気質が集まった多面的な存在であり、だからこそ人生は面白いのだ。そのようなメッセージではないか、と僕は解釈している。



譜例2 第1楽章・冒頭



譜例3 第2楽章より



譜例4 第3楽章・冒頭



譜例5 第4楽章より

京都フィロムジカ管弦楽団

Philomusica Orchester Kyoto

Konzertmeisterin 坂 茉莉江※	Bratsche 石毛 美穂 宅間 司・ 新居 英晃・ 濱田 大貴・ 樽林 哲也・ 古田 直道・	Kontrabass 田中 明江 田中 郁太郎 滝 雄司・ 日浦 啓全・ 山口 奈央子・ 寺村 有史※	Fagott 奥野 智行※ 渡辺 空※	Posaune 宮下 秀行 西村 杏香・
Violine 稲葉 道一 イム ジョンミン 小幡 拓也 田中 隆雄 西田 風音 波部 龍人 安江 絵美子 山内 紘子 渡辺 達之輔 飯田 俊也・ 大鐘 ひなつ・ 柴田 絵美子・ 須田 謙史・ 安原 由克子・ 坂 茉莉江※ 西村 由紀夫※ 福澤 敬子※	Violoncello 内田 裕之 奥村 友梨香 多田 進 西山 峻司 松浦 由香 秦野 貴生 高村 誠・ 岡野 正義※	Flöte 澤田 智美 中川 裕貴 御園生 香 (Piccoloflöte)	Horn 岩井 文香 北山 絵里 砂土居 真央 中澤 美帆 渡辺 悠 西尾 拓哉・ 岡林 由希子※	Bassposaune 安田 泉穂
		Oboe 西川 紗希 服部 光紀 本多 麻子※ (Englischhorn)	Trompete 遠藤 啓輔 北山 武志 (Cornet) 竹下 皓・ (Cornet) 天神 知信・	Tuba 北垣 菜々実・
		Klarinette 植山 彩花 浦野 幸栄		Pauken 徳田 浩樹※
				・ : 団友 ※ : 客演奏者
				団長 多田 進
				事務 西村 浩

客演コンサートミストレス 坂 茉莉江

1989年、大阪生まれ。相愛大学音楽学部を特別奨学生で卒業。モーツァルテウム音楽大学大学院を満場一致の最優秀にて修了。第60回全日本学生音楽コンクール大阪大会高校の部第1位、並びに全国大会第3位、大阪国際音楽コンクール高校の部第2位、第3回神戸新人音楽賞コンクール優秀賞などを受賞。「モーツァルト生誕250周年記念関西フィルコンサート」にて故羽田健太郎氏のピアノと共演、「オーストリア・ボーデンゼーフェスティバル」にてファジル・サイ氏のピアノと共演する。

これまでにソリストとして関西フィルハーモニー管弦楽団、大阪フィルハーモニー交響楽団、日本センチュリー交響楽団と共演、多数のアマチュアオーケストラとも共演を重ねる。2016年ザ・フェニックスホールにて「第66回朝の光のクラシック」坂茉莉江ヴァイオリンリサイタルを開催。

中島美子、本多智子、小栗まち絵、大谷玲子、イゴール・オジム、ウォンジ・キム・オジムの各氏に師事。2015年9月、日本に帰国し、ソロ、室内楽奏者として幅広く活動している。

弦トレーナー 岩井 英樹

名古屋芸術大学卒業。ヴィオラを西岡正臣、ウルリッヒ・コッホ、ジークフリート・ヒュアリンガーの各氏に師事。1997年より大阪フィルハーモニー交響楽団ヴィオラ奏者。

管トレーナー 山崎 雅夫

京都大学卒業。現在、京都大学交響楽団金管トレーナー。トランペットをC. マクベス、A. ハーゼス、M. アンドレの各氏に師事。

京都フィロムジカ管弦楽団「友の会」会員様ご芳名

松村 里香様	西坂 壽美子様	土屋 健太郎様	長田 洋一様
杉本 幸子様	戸田 たか子様	平井 健様	吉田 壽子様
鎗本 和弘様	森永 千一様	豊田 正勝様	
谷口 佳隆様	高岡 拓也様	山本 均様	匿名の会員様

2002年4月に発足しました「友の会」は上記会員の皆様方よりご支援いただいております。(6月現在)新規会員募集中です。詳しくは裏表紙をご覧ください。

京都フィロムジカ管弦楽団からのお知らせ

♡第46回定期演奏会♡

2019年12月22日(日) 八幡市文化センター 指揮：岡本 一生
リムスキーコルサコフ／交響曲第3番
ドヴォルジャーク／交響曲第8番

♡新入団員随時募集中♡

～私たちと一緒に演奏しませんか？ まずはお気軽に見学にお越しください。団員一同、お待ちしております。～
私たち京都フィロムジカ管弦楽団は、近畿のみならず全国各地に在住する団員が週に一度京都に集まり、力を合わせて活動しています。定期演奏会だけでなく、アンサンブルなども楽しんでいます。「一緒に演奏したい！」という皆様のご参加をお待ちしています。遠方からの参加も歓迎します。関西地区以外の方々もご興味があればぜひご連絡ください！

<募集パート>

ヴァイオリン・ヴィオラ・チェロ・コントラバス **(ヴァイオリン・ヴィオラ急募！)**

オーボエ・クラリネット・ファゴット **(ファゴット急募！)**

ホルン・トランペット・打楽器 ※打楽器は、諸条件について要相談

〔参加資格〕 特にありませんが練習に出席できること。学生の参加も歓迎します。

〔練習日時〕 原則日曜日(午後1～5時)、春と秋に合宿練習(滋賀県内)

〔練習場所〕 京都市内の各所のほか、大津市など。

〔諸費用〕 団費3000円/月(学生は1000円)、演奏会参加費など

※遠距離割引、学生割引、家族割引などあり(ご相談ください)

入団・見学に関するお問い合わせ先 E-mail : recruit@kyotophilo.com

♡「友の会」会員随時募集中♡

フィロムジカの活動を応援して下さる方を募集しています

【年会費】 1口 1,000円

【期間】 ご入会いただいた月より1年間

- 【特典】
1. 期間内の定期演奏会に、1口につき1名様を無料ご招待
 2. その他演奏活動のご案内
 3. 定期演奏会プログラムへのご芳名の掲載

お申込み・入会に関するお問合せ Tel & Fax 075-605-0123 (西村) E-mail : tomo@kyotophilo.com

京都フィロムジカ管弦楽団ホームページ

<http://www.kyotophilo.com/>

過去の演奏曲も紹介しております。是非一度ご覧ください。